

第5回 JLPP 翻訳コンクール 英語部門講評

比較文学者、東京大学名誉教授
井上 健

今回、課題文を小説部門、評論・エッセイ部門ともに複数掲げて、応募者が自由に選択できるようにしたのは、昭和以降に限っても95年を越える日本近代文学の厚みと多様性を実感しつつ、課題に取り組んでほしいと願ったがゆえだった。しかし、応募総数が桁違いに多かったこともあって、最終選考に残った訳文はどれも水準が高く、2部門で計4通りの組み合わせの応募作から上位3点を選び出す作業は困難を極めた。

伊藤比呂美「みんなのしつと」は、新聞連載の身の上相談を元に書かれた作品。ウィットに富んだ実践的アドバイスを披露しながら、嫉妬にまつわる踏み込んだ考察が、江戸弁をまじえた自在な話法で、ときに箴言風に展開される。話の筋道はしっかり立っている作品なので、語り口の妙や江戸言葉の効果をどう再現するかが訳出上のポイントとなる。野坂昭如「東京小説 家庭篇」は、連作短篇集『東京小説』の冒頭に掲げられた一篇。「私」が公園で出会った女の語る「東京の物語」を、「私」が「東京小説」として語り直すという仕組みになっている。時代背景や歴史的事実（例えば、昭和20年3月10日は東京大空襲の日）、風俗的事象を的確に把握した上で、野坂独特の句読点の感覚と、うねるように連なりつつしかもテンポのよい文体を、いかに移し替えるかが課題となる。樋口一葉「たけくらべ」を彷彿させる冒頭の2つの段落が難しい。なお「つまりは「可愛い女」であろう」の「可愛い女」は、チャーホフの同名の短篇(1899)およびそのヒロインを指して言ったものである。

田辺聖子「ヒロインの名前」は、人名に焦点を絞ったヒロイン論、女性論。女性名（漢字、訓読み双方）にまつわる、ただローマ字化しただけでは伝わらない知見を、訳文本体にどこまで盛り込めるかの戦略が問われる。谷川俊太郎「思いつめる ほか」は、事の本質を、自ら吟味した概念や表現を用いて、実感を込めて端的に表現したもの。原文の抽象概念をどこまでかみ砕いて訳すか、あるいは抽象名詞に置き換えるべきかの見極めと選択が焦点となる。

最優秀賞のリチャード・ドノバンさんの訳文は、ときに「同化」型の訳法に傾きすぎる箇所も散見されたが、原文のスタイル、語り口への配慮がくまなく行き届き、翻訳文学としての完成度からして一頭地を抜く出来栄であった。優秀賞のアンジェロ・ウォンさんは、気になるミスもいくつかあったが、野坂原文の、脱線や迂回を重ねながら駆け抜ける饒舌さを、果敢に再現しようとした点は評価に値する。同じく優秀賞の手嶋優紀さんは総じて訳文のテンポがよく、田辺聖子の作では、固有名詞談義の脚注的情報を訳文本文の中にもうまく取

り入れる工夫が光った。最後に、今回惜しくも入賞を逃した投稿訳文の中にも、翻訳家としての豊かな可能性を感じさせるものが少なからずあったことを、ぜひとも付言しておきたい。